

1994年(第26回)埼玉医科大学*1

石田 清*2

第26回日本医学教育学会大会は、前例にしたがって開催予定の前年に行われた全運営委員の投票の結果、埼玉医科大学の主宰となった。それ以前の開催施設にならば、大学の教育環境を会員に見学してもらうため、大会会場をぜひ大学内に——との要望が各方面から寄せられていたが、会場への交通、学内設備などの事情により埼玉県川越市で開催された。

期日は平成6年7月20日(火)、21日(水)の2日間。会場は川越プリンスホテル(川越市新富町1-22)、学会事務局は埼玉医科大学内に新設されてまもない医学教育室におかれ、大会の運営は、大会長の埼玉医科大学・石田正統学長と18人の実行委員を軸とし、大学の総力を結集して行われた。

実行委員会において大会の運営方針、基調テーマが討論され、基調テーマは「医学教育の改革を求めて」に決定した。一部にはあまり新鮮味が無いなどの意見もあったが、当番大学にとっては、当時の教育環境や学生・教職員の問題意識などを忖度すると、まことに至適かつ切実なテーマであった。

大会運営方針の1つとして、シンポジウムや討論に十分な時間をかけるため、特別講演、教育講演はなるべく行わず、要望演題および一般演題のすべてをポスター展示とし、参加者があらかじめポスターを見ていることを前提として口演・討論の時間を設定した。口演のテーマ、内容についてはすでに「医学教育第25巻・第5号」に掲載されているので、ここでは主な項目を紹介するにとどめる。

前述の方針に従い、招聘講演1、シンポジウム3および要望演題4の主題が決まった。

招聘講演はオーストラリア・ニューサウスウェールズ大学医学教育科のArie Rotem教授がLearning in Small Groupについて講演され、わが国では若干の大学で試行されはじめたいいわゆるテュートリアルシステムに関心をもつ者にとって、まことに有意義であった。

シンポジウムIは「卒前教育の改革——前臨床期の医学教育」の主題のもとに過程にしたがい語学教育、一般教養の立場および基礎医学の立場の3部門から発表・討論が行われた。シンポジウムIIは「評価をめぐる問題点」であるが、4人の演者がそれぞれ外科系のBSLの評価、内科系のBSLの評価、卒後臨床研修の評価および大学院教育の評価について持論を紹介し熱心な議論が展開された。シンポジウムIII「医師国家試験をめぐる」は、現代の医学教育の現場に立つ者にとって決して避けて通ることのできない問題であり、2人の演者から医師国家試験の形式、出題基準の変遷、現行の医師国家試験の問題点などが明らかにされた。

要望演題として、選抜・評価方法に関するもの11題、卒前医学教育36題、卒後臨床研修11題、生涯教育3題が寄せられたが、さらに一般演題として看護教育に関する5題が採用された。

この大会の特色の1つは、大会初日の会員懇親会終了後、午後8時からアフターディナーセッションとして「テュートリアルシステムの導入/現状と今後の展望」の主題のもとに活発な意見の交換が行われたことである。東京女子医科大学の演者をはじめ各演者には、このシステムを実施するについてあらゆる角度から質疑があつまり、その議論は参加者に多くの感銘を与えた。なお、大会終

*1 The 26th Congress of Japan Society for Medical Education (1994), Saitama Medical School
キーワードズ:

*2 Kiyoshi ISHIDA 埼玉医科大学名誉教授

了後も、このセッションはまことに時宜を得た討論の場であったとの評価を得ている。

また、大会終了後、同会場で、医学教育者のためのワークショップ20周年記念式典ならびに祝賀会が開催された。

大会は2日間にわたり滞りなく進行、終了し、

1つの“いわゆる新設医科大学”の教育施設・環境を見学する機会がなかったことは若干、心残りではあったが、開催校の教職員をはじめ参加会員に対して医学教育に関する新しい motivation を提供し得たことを信じてやまない。参加者総数312名。

* * *